

外反母趾手術後の変形再発に対する危険因子としての  
種子骨整復不良

Postoperative incomplete sesamoids reduction as a risk factor  
for recurrence of hallux valgus

大阪医科大学整形外科

Department of Orthopedic Surgery, Osaka Medical College

奥田 龍三 (Ryuzo Okuda)

木下 光雄 (Mitsuo Kinoshita)

安田 稔人 (Toshito Yasuda)

常德 剛 (Tsuyoshi Jotoku)

北野 直 (Naoshi Kitano)

嶋 洋明 (Hiroaki Shima)

【はじめに】外反母趾手術後の母趾種子骨の整復不良と変形再発との関係については明らかでない。本研究の目的は外反母趾手術例の母趾種子骨偏位を X 線学的に評価し、種子骨偏位と変形再発の関係を明らかにすることである。

【対象と方法】成人女性の健常 50 足（対照群）と外反母趾 65 足（外反母趾群）の荷重位足背底 X 線像を調査した。遠位軟部組織処置と近位中足骨骨切り術を施行した外反母趾群では術前、術後早期（平均 3.1 か月）および最終調査時（平均 45 か月）の X 線像を評価した。Hardy と Clapham が提唱した方法により母趾の種子骨偏位度を I 度から VII 度の 7 段階に分類した。術後早期の種子骨偏位度が IV 度以下を整復良好群（48 足）、V 度以上を整復不良群（17 足）とし、最終調査時の外反母趾角が  $20^{\circ}$  以上を変形再発（16 足）とした。

【結果】種子骨偏位度に関して対照群では 50 足（83%）が IV 度以下、残り 10 足は V 度であった。外反母趾群では術前はすべて V 度以上であったが、術後早期は 48 足（74%）が IV 度以下、最終調査時は 42 足（65%）が IV 度以下となっていた。外反母趾群の外反母趾角に関して術前は平均  $38.3^{\circ}$ （範囲： $25^{\circ}$  から  $60^{\circ}$ ）、術後早期は平均  $11.9^{\circ}$ （範囲： $4^{\circ}$  から  $28^{\circ}$ ）、最終調査時は平均  $13.9^{\circ}$ （範囲： $4^{\circ}$  から  $33^{\circ}$ ）であった。整復良好群では術後早期と最終調査時の外反母趾角の平均値に有意な差はなかった（ $p = 0.084$ ）。しかし、整復不良群では最終調査時の外反母趾角の平均値（ $19.5^{\circ} \pm 8.4$ ）は術後早期のもの（ $15.0^{\circ} \pm 5.8^{\circ}$ ）と比較して有意に増大していた（ $p = 0.0082$ ）。整復不良群は整復良好群に比して有意に外反母趾変形の再発に対する危険性が高かった（odds ratio, 10.0; 95% confidence interval, 2.75 to 36.33）。

【結論】外反母趾手術後における母趾種子骨の整復不良は外反母趾変形の再発に対する危険因子といえることから、術中に母趾種子骨の整復位を確認することは術式の改良や手術成績の向上につながる。